

職工長及支那人

八五名

保險代理店員等

七二名

印刷及製本人

八六名

陶器師

二五名

を列記せる如き、又セトルメント事業の起原として、「英國は多年貧民政済には様々の方策を施して常に手を焼いたのであつた。憐みの情によつて喜捨する方法は一時の氣休であつて、却つて有害であることが明らかになつて來た。……セトルメントの事業が起つて來たし……貧民の教育が最後の救済法であらねばならぬ」と記載せること。獨逸のドライシツヒアツカーの國民大學の學生が「自分等が八時間労働を主張するのは働くのが嫌だからでまなければ、只遊びたいからといふでもない。人間らしく文化を味ふために讀書や研究の時間を得たいからである」といつた言などを引用してある點などは爲政者、社會改良家、社會教育者などの見逃がしてならない個所のやうに思はれた。

この種の教育に關する語は文部省に於て「成人教育」と使用語を一定されたやうに聞いてゐる。さうしてこのことは憲政會の内閣岡田文相の時代に於て、憲政會中教育通を以て聞いた君が大人教育と書くのは他に理由あつたか。發行所、東京、モナス、定價壹圓。(伊藤猷典)

文學士 加藤仁平著 和魂漢才說

管家遺誠の中の第二十一章、第二十二章、就中私魂漢才なる句を歴史的に考察したものである。

日本教育史教科書などに和魂漢才なる語が管公の言として屢々引用されてあつた。さうしてこのことの誤なることは文學士高橋俊乘君によりて既に四五年前に發表せられてあつた。その理由は管家遺誠は後人の偽作であること、と、魂なる語は古代に於ては現今さばつた意味に用ゐられてゐたといふ二點であつたと記憶する。

今加藤君の研究は更に一步を進めて管家遺誠を稱する現今日本に存する凡ての寫本・版本を集め、且これに關する舊來の史家の研究を渉獵し、嚴密なる科學的方法を用ひた結果和魂漢才云々の句の含まれたる第廿二章は谷川士清が日本書記通證に評語として用ひしものが竄入されたものであり、第廿一章はそれより幾分後れて竄入されたものであると斷案を下されたのである。而して今後如何なる史料が発見されてもこの斷案だけは覆へる筈はないとの確信を有してゐるのである。猶更にかゝる竄入の背景には本居宣長、平田簡胤等を中心にして和魂に關する議論の囀はされてゐたこと、天淵宮の信仰が如何様にあつたか、偽作されたる管家遺誠が後世に如何なる影響を及ぼしたか等の文化史的研究をも忽諸に付せなかつた點に於て單なる歴史家の企及しえない、教育思想史研究家としての加藤君の手腕が現れてゐる。菊版、三五四頁、東京、培風館發行、定價三圓八十錢(伊藤猷典)